すくも自主防災会だより　第3号

じしんまん ©やなせたかし

取り残された「ゆれ」への対応

激震から自己を防護し生存することができずして、引き続きやってくる大津波の脅威を論じるほどこっけいな話はありません。東日本大震災は、地震の発生時間帯が昼間の活動時間帯であったことで、激震そのものによる人的被害は極めて低いものであったはずと想像されています。

生々しい大津波の映像情報に国民は誰もが息をのみ、気が付けば、「大津波」の前段階脅威であったはずの「激震」という概念はどこか舞台の隅っこに吹っ飛んでおりました。舞台の上はいつの間にか大津波という役者一色になってしまいました。あれから2年半が過ぎ、今はどこもここも「防災＝対津波」に偏りきってしまい、いつの間にか「ゆれから人命・身体防護」という地震の原点であり足元への注視が薄らいできているように思えてなりません。あなたは長時間（2分超）に及ぶ激しい揺れに耐え何とか生存スペースにもぐりこんで生き延びる強い意識をお持ちですか。そのための可能な着意を心掛けていますか。

阪神淡路大震災での被害は発生時間帯が早朝であったこともあり、90％が寝室内で発生したものでした。寝ているとき以外に発生した地震においては、人的被害は極端に低下します。逆に言えば、寝室さえ安全であれば地震で致命的な被害を受ける可能性は極めて低くなると言えるのです。

人は起きているときは、それなりにとっさの行動がとれますが、意識のない状態で危険が迫ったとしたら、そのまま何もできずに目が覚める前に死んでしまう可能性が十分に考えられます。寝室においては、地震発生後の対応というよりも、平素いかに被害を受けない空間にしておくか、ということがとても重要なポイントなのです。部屋にはベッド以外何も置かないのが一番いいわけですが、棚の上の重量物や人形ケースなどガラス製の壊れ物をすべて撤去しておくだけでもかなりの違いです。ベッドサイドのテレビやオーディオセットなども危険です。たとえ低い場所に置いているとしてもタテ揺れの巨大地震が発生すれば、物は浮き上がってあなたを襲うかもしれません。

たいさくくん
©やなせたかし

防災で最も重要なことはまず住居、それも寝室の安全性を高めることです。無防備な状態で地震に遭う最悪事態を回避すべく、実現可能なところから実行に移そうではありませんか。まず寝室最優先で、家具や重量物の位置を点検してみましょう。そう、今夜にも巨大地震があなたを襲う可能性はあるのです。

「防災隣組」の発想

トラフ博士 ©やなせたかし

これは「共助」と「自助」をつなぐ、かすがいのような仕組みです。昨今では、隣近所に誰が住んでいるのかもよく分からないほど人間関係が希薄化する風潮にありますが、これではいざというときに人間関係をプラスに活用することはできません。だからこそ、向こう三軒両隣を束ねるユニットを構築し、お互いの連帯感を強く意識させるよう仕向けていくことが、大変重要なことだと感じています。

高知県の場合、発災時の公的な援助の手立てが厳しくなる局面は容易に想像でき、県内各地域がそれぞれ孤立化し、援助が期待できない状況が相当期間に及ぶであろうことにかんがみても、希望的観測にすがって公的な何かを期待するのではなく、「公助の限界」を冷厳に受け止めなければなりません。阪神淡路大震災で亡くなった人のうち、8割以上は地震発生後の14分以内に死亡しているとのデータが当時の監察医報告資料からも明らかにされています。警察や消防などが14分以内に現場に駆けつけることなど全く考えられないことなのです。助けられる命を助けることができるとすれば、それは、まさに近所、いや「近助」しかないのであって、近隣の絆こそが欠かせないのです。回覧板を回し、少しでも言葉を交わし、顔を見る。そんなさり気ないいつもの積み重ねが、いざという時のお互いの備えにつながる。地震に引き続く大津波のリスクに対しても、平素からの隣組意識があれば、軽易に「おーい！逃げるぞ！」と相互に率先避難のけん引役となれるなど、マンションやアパートのひとつのフロアでも、災害時にはそれが運命共同体としての力になってくるのです。防災減災への意識醸成の切り札は、まさにこのような「防災隣組」の発想なのかもしれません。

（宿毛市自主防災会連絡協議会
役員代表　河野典生）